

研究ノート



医療的ケアを担う特別支援学校に勤務する看護師の他職種および保護者との連携と仕事満足との関連

古株ひろみ¹⁾、泊 祐子²⁾、竹村 淳子²⁾、道重 文子²⁾、谷口恵美子³⁾

¹⁾滋賀県立大学人間看護学部

²⁾大阪医科大学看護学部

³⁾岐阜県立看護大学

背景 医療的ケアの必要な子どもの増加により、特別支援学校における医療的ケアも全国的に広がりをみせた。そのことによる新たな課題には、1)適正・安全な医療的ケアの実施、2)連携・協働の視点を明確にした看護師との協働の在り方、3)医療的ケアの教育上の意義の構築がある。一方、看護師導入における課題として、担任・養護教諭との連携・協働に関する課題があげられる。医療現場とは異なる学校での活動に看護師も戸惑い、逆に異業種である看護師と協力を必要とする教育現場の教員の戸惑いも大きい。このような現状では、看護師・教員がどの様に連携していくのが重要となる。

目的 医療的ケアを支える看護師がより働きやすく、より円滑な医療的ケアを提供できるように、看護師と担任教諭・養護教諭および保護者等周囲の人との連携が、看護師の仕事への満足度にどのように関連するかを明らかにすることを目的とした。

方法 近畿、東海地方の特別支援学校に勤務する看護師を対象に、質問紙調査を実施した。

分析には統計解析ソフトSPSS16.0 for Windows を用いて χ^2 検定、Fisherの直接法を行なった。

結果 特別支援学校の看護師の仕事内容に対する満足度は、「満足群」が50名(58.8%)、「不満足群」が35名(41.2%)であった。

「お互いの専門性を理解しあえている」、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」、「医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい」、「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」などの回答は、「満足群」が「不満足群」に比較して有意に高かった(p=0.01)。

結論 医療的ケアの実施に関する項目と、仕事への職務満足との関連性から、学校における看護師は医療的ケアを実施することで看護師としての役割を果たしていると感じている。さらには、看護師としての専門性が発揮できるという認識が、仕事への満足に繋がっていると考えられる。また、限られた情報しか得ることのできない看護師にとって、教員など他職種と上手く連携することが、医療的ケアを安全に実施するには必要である。円滑な連携から情報が得られることも、職務満足度に寄与していた。

キーワード 医療的ケア, 特別支援学校, 学校に勤務する看護師, 連携

Contribution of collaborative relationship between nurses, parents and other professionals to job satisfaction in nurses working in special-needs schools

Hiromi Kokabu¹⁾, Yuko Tomari²⁾, Junko Takemura²⁾, Fumiko Michishige²⁾, Emiko Taniguchi³⁾

2011年9月30日受付、2012年1月9日受理

連絡先: 古株ひろみ

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町2500

e-mail: kokabu@nurse.usp.ac.jp

I. 緒 言

特別支援学校における痰の吸引など医療的ケアの課題は、平成元年頃から特に大都市圏を中心に浮かび上がってきた。当初、医療的ケアが必要な子どもには保護者の付き添いが義務付けられ、24時間のケアを担っている保護者の大きな負担を教員も十分に認識し、特別支援学校の職員会議等で検討されるなど大きな課題であった¹⁾。

平成2~10年は横浜市、東京都、大阪府、埼玉県、神奈川県などの自治体は独自で委員会を設け検討し、独自方式で対応していた。各都道府県の取り組みは、①教員による実施、②教員と看護師による実施、③訪問看護ス

ーション制度の利用、④保護者の実施、と実情に合わせた内容であった²⁾。このような各都道府県の取り組みを背景に、文部科学省は平成10年度から「特殊教育における福祉・医療との連携に関する実践研究」を10県で開始した。本課題は、①養護学校における医療的バックアップ体制、②盲・聾・養護学校の児童・生徒の福祉・医療ニーズへの対応であった。その成果を踏まえ、文部科学省、厚生労働省が連携協力して、養護学校における医療的ケアの実施体制を図ることとなった。平成15年度から「養護学校における医療的ケアに関するモデル事業」を全国32都道府県で開始した。本モデル事業は、看護師を配置し、医師、看護師、教員等の相互連携による学校での対応体制の整備、学校と福祉、医療機関などの相互連携及び医療機関と連携した医療的バックアップ体制の推進、運営協議会や校内委員会の設置、緊急時の対応体制の確立から構成されていた。その後全国的に特別支援学校への看護師の配置が広がった³⁾。平成16年10月に「盲・聾・養護学校におけるたんの吸引等の取扱いについて」の通知が厚生労働省医政局長名で出され、法的整備がなされた。痰の吸引等日常的・応急の手当てについては、医行為とみなさずに、「医療的ケア」と位置づけ、「一定の条件が満たされれば、看護師等の医療職者と協力し、学校で医療的ケアに取り組んでいく」ことが明示され⁴⁾、重度障害児の学校での活動に看護師の存在が不可欠となった。

しかし、医療的ケアの全国的な広がりとともに新たな課題として、1)適正・安全な医療的ケアの実施、2)連携・協働の視点を明確にした看護師との協働の在り方、3)医療的ケアの教育上の意義の構築があげられた⁵⁾。一方、勝田⁶⁾は、看護師側からみた、看護師導入の課題として、担任・養護教諭との連携・協働について、教諭・看護師双方ともお互いに分かり合えない、分かってももらえないという課題をあげている。医療現場とは異なる学校での活動に看護師の戸惑いは大きい。同時に、教育現場においても、異業種である看護師と協力を必要とする教員の戸惑いも大きいと思われる。

医療的ケアに携わる看護師を対象とした職業性ストレス調査票を用いた空田ら⁷⁾の調査によると、「教員・看護師協働型」群が「看護師主導型」群よりもストレス尺度が有意に高い値を示していた。さらに「教員・看護師協働型」群では、仕事の負荷が変動することに対してストレスを感じている傾向を示していた。これらの結果は、看護師が他職種との連携・協働に課題を抱えていることを示していて、特別支援学校で働く看護師の離職率の問題にもかかわると推測される。病院に勤務する看護師の離職予防に関する研究では、職務満足度や同僚や上司のサポートなどが離職に影響することが示されている⁸⁾⁹⁾。病院とは異なる学校に勤務する看護師のサポートとして、

他職種の存在は大きい。そこで、他職種との連携・協働にはどのような課題があるのかを追求する必要がある。

II. 目的

医療的ケアを支える看護師がより働きやすく、より円滑な医療的ケアを提供できるように、看護師と担任教諭・養護教諭および保護者等周囲の人との関係の状況を検討し、その状況が仕事への満足にどのように関連するか明らかにすることを目的とした。

III. 用語の定義

医療的ケア：医師法上の「医行為」と区別して、医師の許可の下、医師や看護師の指導を得るなどの一定の条件を満たした場合に、学校において担任教員が行ってもよいとされている行為。咽頭から手前の吸引、挿入されている管への経管栄養の接続をいうこれらの行為は、重度重複障害児が生きていくために、日常的に必要とする痰の吸引や、鼻などから管を通して栄養剤を注入する経管栄養など、在宅で家族が日常的に行っている医療的介助行為に該当する。

IV. 方法

1. 対象

近畿、東海地方の特別支援学校に勤務する看護師を対象とした。

2. 調査方法

東海・近畿地方にある特別支援学校のうち、校種が肢体不自由・病弱と明示している113校の学校長宛てに本研究の趣旨及び倫理的配慮についての文書と自記式調査票を郵送し、学校長から看護師に調査票を配布してもらうように依頼した。尚、返送をもって同意が得られたこととした。

3. 調査項目

看護師の特性（年齢、看護師経験、学校経験、障害児看護の経験等）と、先行研究¹⁰⁾¹¹⁾や学校に勤務する看護師の経験的指標などを元に作成した仕事への職務満足および児童・生徒を取り巻く周囲の人との関係に関する質問11項目からなり、回答は「当てはまらない」から「よく当てはまる」までの4段階のリッカート法を用いた。

4. 分析方法

看護師の特性および仕事への職務満足と児童・生徒を取り巻く周囲の人との関係に関する項目について、統計

解析ソフトSPSS16.0 for Windowsを用いて、 χ^2 検定、Fisherの直接法を行ない分析した。

V. 倫理的配慮

研究への参加・不参加は自由意志であること、不参加の場合にも学校名は公表しないこと、データは厳重に管理し、学校や個人の秘密を守り、学校名や個人が特定されないようにプライバシーの保護に努めることを保障した。看護師が調査に協力したかどうかが学校長にもわからないように、回答用紙は個別封筒にて返送できるようにした。調査票及びデータは研究終了後に速やかに破棄することを約束した。

本研究は、研究者が所属する大学の倫理審査委員会の審査を受け、承認された。

VI. 結果

調査票の返送は128通りあり、有効回答数は102名(79.6%)であったが、本論文で対象とするデータ、「児童・生徒を取り巻く周囲の人との関係に関する質問および仕事満足」に欠損がない回答数は85名であった。この85名の年齢は42.3±12.26(平均値±標準偏差)歳<中央値42.0>、看護職経験年数は17.0±9.39歳<中央値14.5>(うち学校経験:3.6±2.70歳<中央値3.0>)年であった。

小児看護経験の有無について「経験ある」は、48名と半数以上を占めていた。また、障害児ケア経験の有無について「経験ある」は28名であり、「経験なし」は57名と障害児ケアの経験者は3割を超える程度であった。

85名の雇用形態は様々であったが、正規職員的な立場の者は3名であり、他はすべて非常勤、臨時雇用、嘱託、派遣などといった雇用形態であった。

児童・生徒を取り巻く周囲の人との関係に関する質問11項目について、4段階の回答を「当てはまる」と「当てはまらない」の2段階に修正した結果を表1に示した。対象者の6割以上が当てはまると回答した項目は、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である(61.2%)」「担当教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい(74.1%)」といった医療的ケアが実施しやすい項目、「養護教諭との連携は取りやすく、医療的ケアをする児童・生徒の情報は円滑であり、アセスメントしやすい(69.4%)」「医療的ケアのある児童・生徒を担任している教諭との連携が取りやすく、情報収集が円滑でアセスメントしやすい(67.1%)」といった教員・養護教諭との円滑な連携による情報収集から医療的ケアの判断がしやすいとする項目、「看護師間の報告・連絡など情報交換がしやすく、記録も充実できている

(82.4%)」「看護師間でお互いに専門性を高めて、意識してチームアプローチができている(60.0%)」といった看護師間の連携の良さに関する項目の、計6項目であった。逆に、6割以上の者が「当てはまらない」と回答した項目は、「医療的ケア必要児の記録が充実し、3職種間で共有が図れている(75.3%)」とする記録の共有、「保護者との接触が直接的に行いやすく、信頼関係が築きやすい(63.5%)」「医師との連絡は取りやすく、児童・生徒の健康状態について考えやすい(84.7%)」など、保護者や医師との関係に関する項目であった。

仕事内容に対する満足については、「満足」は10名、「やや満足」は40名であり、「やや不満足」は33名、「不満足」は2名であった。

仕事内容に対する満足について、「満足」「やや満足」を「満足群」とし、「やや不満足」「不満足」を「不満足群」とする2群に修正して、他職種および保護者との連携との関係について分析した結果を表2に示した。

「保護者との接触が直接的に行いやすく、信頼関係が築きやすい」とする項目以外の10項目において「満足」と「不満足」との間に有意な差が認められた。

特に下記の6つの項目、「お互いの専門性を理解しあえている」「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」「医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい」「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施し

表1 他職種及び保護者との関係

	当てはまる		当てはまらない	
	n	(%)	n	(%)
お互いの専門性を理解しあえている	50	(58.8)	35	(41.2)
学校内での医療的ケアへの理解が進み働きやすい状況である	52	(61.2)	33	(38.8)
養護教諭との連携は取りやすく、医療的ケア児の情報収集円滑でアセスメントしやすい	59	(69.4)	26	(30.6)
医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい	57	(67.1)	28	(32.9)
担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい	63	(74.1)	22	(25.9)
看護師間の報告・連絡など情報交換がしやすく、記録も充実できている	70	(82.4)	15	(17.6)
看護師間の専門性を高めて、意識してチームアプローチができている	51	(60.0)	34	(40.0)
医療的ケア児の記録が専門職間で共有できる	21	(24.7)	64	(75.3)
保護者との接触が直接的に行いやすく、信頼関係が築きやすい	31	(36.5)	54	(63.5)
保護者に直接接触できにくい情報が養護教諭や教員から得やすい	50	(58.8)	35	(41.2)
医師との連絡が取りやすい	13	(15.3)	72	(84.7)

表2 他職種及び保護者との連携と仕事満足

		満足 n=50		不満足 n=35		χ^2 test, Fisher's exact test
		n	(%)	n	(%)	p 値
お互いの専門性を理解しあえている	当てはまらない	0	(0)	5	(14.3)	0.001
	あまり当てはまらない	15	(30.0)	15	(42.9)	
	当てはまる	27	(54.0)	15	(42.9)	
	よく当てはまる	8	(16.0)	0	(0)	
学校内での医療的ケアへの理解が進み働きやすい状況である	当てはまらない	0	(0)	5	(14.3)	0.001
	あまり当てはまらない	15	(30.0)	15	(42.9)	
	当てはまる	29	(58.0)	14	(40.0)	
	よく当てはまる	6	(12.0)	1	(2.9)	
養護教諭との連携は取りやすく、医療的ケア児の情報収集円滑でアセスメントしやすい	当てはまらない	2	(4.0)	3	(8.6)	0.026
	あまり当てはまらない	7	(14.0)	14	(40.0)	
	当てはまる	27	(54.0)	12	(34.3)	
	よく当てはまる	14	(28.0)	6	(17.1)	
医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい	当てはまらない	1	(2.0)	2	(5.7)	0.004
	あまり当てはまらない	8	(16.0)	17	(48.6)	
	当てはまる	28	(56.0)	12	(34.3)	
	よく当てはまる	13	(26.0)	4	(11.4)	
担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい	当てはまらない	0	(0)	2	(5.7)	0.002
	あまり当てはまらない	6	(12.0)	14	(40.0)	
	当てはまる	32	(64.0)	16	(45.7)	
	よく当てはまる	12	(24.0)	3	(8.6)	
看護師間の報告・連絡など情報交換がしやすく、記録も充実できている	当てはまらない	0	(0)	3	(8.6)	0.005
	あまり当てはまらない	3	(6.0)	9	(25.7)	
	当てはまる	28	(56.0)	16	(45.7)	
	よく当てはまる	19	(38.0)	7	(20.0)	
看護師間の専門性を高めて、意識してチームアプローチができている	当てはまらない	1	(2.0)	4	(11.4)	0.012
	あまり当てはまらない	12	(24.0)	17	(48.6)	
	当てはまる	30	(60.0)	11	(31.4)	
	よく当てはまる	7	(14.0)	3	(8.6)	
医療的ケア児の記録が専門職間で共有できる	当てはまらない	3	(6.0)	9	(25.7)	0.004
	あまり当てはまらない	29	(58.0)	23	(65.7)	
	当てはまる	17	(34.0)	3	(8.6)	
	よく当てはまる	1	(2.0)	0	(0)	
保護者との接触が直接的に行いやすく、信頼関係が築きやすい	当てはまらない	5	(10.0)	9	(25.7)	0.063
	あまり当てはまらない	22	(44.0)	18	(51.4)	
	当てはまる	20	(40.0)	8	(22.9)	
	よく当てはまる	3	(6.0)	0	(0)	
保護者に直接接できにくい情報が養護教諭や教員から得やすい	当てはまらない	0	(0)	5	(14.3)	0.008
	あまり当てはまらない	15	(30.0)	15	(42.9)	
	当てはまる	29	(58.0)	14	(40.0)	
	よく当てはまる	6	(12.0)	1	(2.9)	
医師との連絡が取りやすい	当てはまらない	17	(34.0)	15	(42.9)	0.039
	あまり当てはまらない	21	(42.0)	19	(54.3)	
	当てはまる	11	(22.0)	1	(2.9)	
	よく当てはまる	1	(2.0)	0	(0)	

やすい」「看護師間の報告・連絡など情報交換がしやすく、記録も充実できている」「医療的ケア児の記録が専門職間で共有できる」「保護者に直接接しにくい情報は養護教員や教員から得やすい」においては、有意水準1%で有意な差が認められた。

他職種および保護者との連携との関係では、小児看護経験の有無で有意差は認められなかった。

さらに、学校経験年数を1年未満(18名)、3年未満(24名)、3年以上(43名)の3群に分け、他職種および保護者との連携との関係について分析した結果、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」($p=0.04$)にのみ有意差がみられ、経験年数が多い方が、有意に高かった。

Ⅶ. 考 察

NICU退院後、経管栄養、在宅酸素、人工呼吸などの在宅医療を要する児の数は増加傾向にあり¹²⁾、更に障害の重度・重複化が顕著になる¹³⁾等、医療的ケアを抱えながら地域で生活する児の現状は大きく変化してきている。特別支援学校においても医療的ケアを必要とする児童・生徒は平成15年からは毎年200名ほどの増加¹⁴⁾がある。教員による医療的ケアは、看護師配置などの一定の条件下で、実施できるようになったため¹⁵⁾、重度障害児の学校的生活には看護師の存在が不可欠となった。更に、特別支援学校での医療的ケアは、呼吸に関すること・栄養に関する事が多く、医療的ケアの内容の6割は看護師でなければ出来ない³⁾内容である。このような状況から、特別支援学校に勤務する看護師数も平成17年度の597名から平成22年度には1,148名と約2倍に増加している³⁾。看護師配置による効果としては、医療関係者の理解や福祉・医療機関からの協力を得やすいこと、さらには、児童・生徒の生活リズムが整ったことによる欠席の減少や、授業の継続性の保持、保護者の負担軽減などがあげられる¹⁶⁾。医療的ケアが必要な児童・生徒にとって、学校での看護師の役割は重要なものとなりつつある。しかし、看護師の多くが非正規職員であるといった雇用条件の問題や、教育という場の孤立感や戸惑い¹⁷⁾、担任・養護教諭との連携・協働の難しさなど、働くことへの課題も多い。

そこで、看護師配置が充実してきた現段階で、医療的ケアを支える看護師がより働きやすく、より円滑な医療的ケアを提供できるように、看護師と担任教員・養護教諭および保護者等周囲の人との連携の状況を把握し、その仕事への満足の関連を明らかにすることを目的に、調査を行った。

今回の調査では、特別支援学校の看護師は、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」

「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」といった医療的ケアの実施の円滑さを示す項目、「医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい」「保護者に直接接しにくい情報は養護教員や教員から得やすい」とする医療的ケア実施への判断となる情報収集に関する項目において、仕事への職務満足との関連性が認められた。

丸山ら¹⁰⁾は養護学校の養護教諭・教員・看護師に対し、それぞれの役割認知に関する質問紙調査から、医療的ケアの直接対応は、どの職種よりも看護師自身が関与すべきものという認識が高いことを示していた。また、医療的ケア実施に伴う調整に関しては、「医療的ケア方法の工夫や改善の提案」「医療的ケアについて保護者や教員への情報提供や助言」といった役割は看護師自身が今後実施するべき役割であるとの認識が高いことも示している。池田¹⁸⁾らも同様に、実際の職務よりも看護師が考える看護師の職務は、教員の医療的ケアへの指導助言、学校医との連携・連絡、感染予防など専門職としての知識技術の提供であるといった結果を述べており、看護師が医療的ケアの実施を通して専門性を発揮できる職務を望んでいることが伺える。今回の調査からも医療的ケアの実施に関する項目と仕事への職務満足との関連性から、学校における看護師は医療的ケアを実施することで看護師としての役割を果たしていると感じていることが明らかとなった。さらには、看護師としての専門性が発揮できるという認識が、仕事への満足に繋がっているのではないかと推測される。

また、特別支援学校では、医療的ケアが必要な児童・生徒のそばに常にいるのは教員である。看護師は限られた時間で医療的ケアを実施しており、看護師がそばにいない時の状態を教員から情報収集し、それらを総合して看護アセスメントを行っている¹⁷⁾。山田らの報告では¹⁹⁾看護師には保護者への連絡が直接とれないといった情報収集の困難さがあり、保護者の承諾を得、養護教諭を介さなければ主治医との連絡も取れないなど連携の善し悪しが情報収集に影響している実情を示している。更に、看護師の方から情報提供して、担任や養護教諭や保護者との連携をはからなければ子どもの健康状態を判断できず、ケアの実施の責任も看護師のみでは負えない¹⁹⁾と述べ、看護師は教員など他職種と上手く連携することが、医療的ケアを安全に実施するには必要不可欠であることが伺われる。勝田¹⁷⁾は十分な情報がない中で、子どもの状態をアセスメントし、情報から予測し、確認する力と経験の積み重ねが必要であるとし、看護師の日々の職務への取り組みへの大切さを示唆している。

しかし、学校において唯一医療職である看護師がさまざまな場面でのアセスメントやケアの実施で自信を持って行えるためには、医療施設以上の自己研鑽が必要であ

るとともに、身近な相談相手が必要¹¹⁾とされている。学校という組織の中で看護師が医療的ケアだけでなく、職場の一員としてどのように連携・協働していくかが今後の課題でもあり、離職予防の要素である同僚・上司のサポートの在り方にもつながるものであると考えられる。看護師の組織へのつながりは「自己の存在価値の実感」「仲間との良好な関係」「チームケアへの満足」「充実感・やりがいの実感」などから起こっていることが示されている²⁰⁾。今回の調査から、学校に勤務する看護師にとっても同様に、チームとしての良好な人間関係と、その結果専門性ある職務の遂行が満足につながり、さらに仕事へのやりがいなどに通じていくのではないかと考えられる。

教員は教育的視点を優先し、看護師は身体観察からのアセスメントを優先している。それぞれの優先性の違いからの戸惑いや不安といったことも離職に影響している²¹⁾が、まずはお互いの専門性をみとめることが必要である。今回の調査からも専門性を理解しあうことと職務満足とに関連性がみられたことも理解できる結果であった。

多職種との連携については、菊池氏のチームモデルを用いた在り方についても検討されている¹⁷⁾。しかし、看護師の雇用条件など²²⁾²³⁾から、看護師には時間的制約があり、教員との連絡やカンファレンスに時間がかけられないといった現状もあり、雇用条件の検討など各課題への整理が急務である。

VIII. 結 語

医療的ケアを担う看護師と、担任教諭・養護教諭および保護者等周囲の人との関係の状況を検討し、その状況が仕事への満足にどのように関連するかを調査したところ、以下の結果が得られた。

1. 特別支援学校の看護師の仕事内容に対する満足は、「満足群」が50名(58.8%)、「不満足群」が35名(41.2%)であった。
2. 看護師の仕事職務の満足度については、「お互いの専門性を理解しあえている」、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」、「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」など、医療的ケアが実施しやすい内容に関する項目で、「満足群」と「不満足群」の間に有意な差が認められた。

謝 辞

本研究へのご協力をいただきました特別支援学校看護師の皆様と回答への許可をいただきました学校長にお礼申し上げます。本研究は文部科学省科研費(課題番号22

592558)の助成を受けて実施した。

文 献

- 1) 全国心身障害児福祉財団古川勝也編：医療的ケアへの対応実践ハンドブック，11-15，全国心身障害児福祉財団，2005.
- 2) 伊藤文代・中村朋子：肢体不自由児養護学校における医療的ケアの動向，学校保健研究 46，674-685，2005.
- 3) 文部科学省：平成22年度特別支援学校医療的ケア実施体制状況調査結果について、2011.5
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1306726.htm
- 4) 文部科学省初等中等教育局：盲聾養護学校におけるたんの吸引等の取り扱いについて(通知)、2004.10.
- 5) 飯野順子：医療的ケアの新たな展開，学校保健研究 48，385-391，2006.
- 6) 勝田仁美：養護学校における医療的ケアを実施する看護師の課題，学校保健研究48，405-412，2006.
- 7) 空田朋子・林隆：特別支援学校において医療的ケアに携わる看護師のストレスについての検討—日本語版NIOSH職業性ストレス調査票を用いて—，小児保健研究 68(5)，559-565，2009.
- 8) 上野恭子：看護師における「組織コミットメント」の概念分析，看護研究 38(2)，139-151，2005.
- 9) 高橋弘司：態度の測定(Ⅰ)：職務満足，白桃書房，107-130，1999.
- 10) 丸山有希・村田恵子，養護学校における医療的ケア必要児の健康支援を巡る多職種間の役割と協働，看護師・養護教諭・一般教職員の役割に関する現実認知と理想認知，小児保健研究 65(2)，255-264，2006.
- 11) 小室佳文・加藤令子：医療的ケア実施校の教員からみた医療的ケア実施の現状，小児保健研究 67(4)，595-601，2008.
- 12) 徳田幸子・細井創：特集「京都府における周産期医療の現状と将来」．京都府の新生児医療における大学の役割，京都府立医科大学雑誌 118(6)，389-396，2009.
- 13) 村田茂・飯野順子：肢体不自由教育における今日の課題と今後の方向—養護学校における医療的ケアの在り方の検討—，筑波大学学校教育論集 19，1-9，1996.
- 14) 下山直人：特別支援学校における医療的ケア—特別支援学校の概要、医療的ケアに関する経緯、現況、看護師への期待—，小児看護 34(2)，142-147，2011.

- 15) 在宅及び養護学校における日常的な医療の医学的・法律学的整理に関する研究会：盲・聾・養護学校におけるたんの吸引等の医学的・法律学的整理に関する取りまとめ，特別支援教育 16，6-14，2005.
- 16) 古川勝也：医療的ケアの現状と今後の取り組み(2)，養護学校の教育と展望 131，42-44，2003.
- 17) 勝田仁美：養護学校における医療的ケアを実施する看護師の課題，学校保健研究 48，405-412，2006.
- 18) 池田友美・郷間英世他：肢体不自由養護学校における看護師と養護教諭の役割に関する調査，小児保健研究 68(1)，74-80，2009.
- 19) 山田初美・津島ひろ江：A特別支援学校(肢体不自由)における看護師の業務内容と業務量，日本小児看護学会誌 19(1)，73-79，2010.
- 20) グレック美鈴：臨床看護師の組織コミットメントを促す経験，岐阜県立看護大学紀要 6(1)，11-18，2005.
- 21) 勝田仁美：特別支援学校における看護師の役割と活動，小児看護，34(2)，155-162，2011.
- 22) 川上瑠夏・徳永真由美：特別支援学校で働く看護師による子どもたちへの医療的ケアの実際，小児看護 34(2)，163-169，2011.
- 23) 齋藤麻子：養護学校における小児在宅ケア支援の現状と課題，小児看護 30(5)，629-635，2007.